

## 理解学習 実践例

### B 中学校の例

新入生に難聴生徒が在籍している B 中学校では、難聴に対する理解を図ろうと職員研修を申込み、8月に実施しました。その際、生徒にも体験させたいという意見や難聴生徒の希望等から理解学習の依頼のメールをいただきました。

#### ① 申込み

9月上旬 当該生徒と保護者の希望を確認した上で、当該学年への理解学習希望の連絡（メール）

#### ② 打合せ

9月中旬 電話・メールで「日時」「対象クラス」を決定 「実施前アンケート」送付

9月下旬 電話で、「希望の内容」「難聴児の状況や困っていること」等を確認  
中学校から聴覚支援学校へ「依頼状」送付

10月上旬 電話で当日の進め方について確認

10月下旬 本校より「当日資料」「感想用紙」送付（メール）

#### ③ 当日

10月下旬 難聴理解学習実施（50分）

- ・（説明）難聴とは、補聴器について
- ・（体験）聞こえにくさの疑似体験を通した心情理解等
- ・（話し合い・説明）学校生活の中で協力できること
- ・（感想記入）プリント

#### ④ フィードバック、その後

12月 本校より「実施後アンケート」送付（メール）

担当者（難聴学級担任）とその後の状況等について協議

職員研修をきっかけにして、難聴理解学習を実施した B 中学校。その後の様子について、実施後アンケートや、難聴学級担任・特別支援教育コーディネーターとのやり取り、当該生徒の教育相談等を通して、継続してつながりをもっています。

## 難聴理解学習の意義

難聴児童生徒が通常の学級で学習や生活をする場合、さまざまな誤解やトラブルを生じることがあります。その原因の一つに、学級の子どもたちが難聴を理解できていないことがあげられます。そこで、発達年齢に応じて、またその難聴児童生徒の難聴の程度に応じて、学級の子どもたちが難聴についての理解を深めていくことが大切になります。このことは、将来、子どもたちが社会で共に生きていくために重要であり、また、難聴児童生徒自身が積極的に生きようとする姿勢を育むことにもつながります。

〈引用〉『難聴児童生徒のきこえの支援 補聴器・人工内耳を使っている児童生徒のために』

平成16年12月25日発行 発行者 財団法人日本学校保健会

## 難聴理解学習の感想

小1

とおくからはなしてきこえなかったら「なんでむしするの」っておこらないで、かたをたたくのをがんばります。

小4

耳が聞こえないとなんでみんなわらっているのだろうと思い、おいてきぼりにされている気持ちになると分かりました。

小6

小さすぎても聞こえないけど大きすぎても耳に負担をかけてしまうと知ったので、話をするときには声の大きさやタイミングを考えて話そうと思いました。

中1

難聴生徒本人

先生からみんなにわかりやすく伝えてくれたので少し安心しました。自分の伝えたいことをみんなの前で話したとき、真剣に聞いてくれて「理解してくれたんだな」と思いました。